

「やまいの語りを聴く」—東京薬科大学薬学導入教育における展開

○土屋 明美¹, 與那 正栄¹, 渡辺 謹三¹, 井上 みち子¹, 成井 浩二¹, 横松 力¹
 (¹東薬大薬)

【目的】薬学導入教育において患者理解を深めるために「やまいの語り」を聴き、問題意識を成立させ共感的理解がどのように涵養されているかについて考察する。【方法】1 年次後期に開講される薬学入門演習Ⅱにおける「やまいの体験を聴く」講座について質問紙法を行い分析する。【経過】本学における薬学入門演習Ⅱは、車椅子介助・高齢者体験・不自由体験・救急救命・SGD から構成されている。例年、演習の最後の講義は車椅子ユーザーによる体験談を全員で聴取してきたが、本年度は新たに「やまいの語り手」との距離をより近づけることを目途して 1 クラス 30 人ほどの SGD において一人の語り手の話を聴く場も合わせて設けた。なお、語り手として本学 SP 研究会会員のご協力をいただいた。【結果】SGD の経過：
 ①やまいの語りを聴き・質疑応答（レポートは「語り手への手紙」として提出する）
 ②小グループによる感想の共有 ③各自が選んで読んだ闘病記の紹介・感想
 ④やまいの語りと闘病記を題材にしたテーマ別 SGD・プロダクト作成・プレゼン
 ⑤自己評価（闘病記・やまいの語りについて、他）【考察】語り手への手紙では「もし私だったら～出来ない」と自分と距離をおく表現、「病気の人に見えない」など病気へのある先入観をふまえての表現が多々みられた。語り手の年齢が 60～80 代と人生経験豊かでありゆるぎない言葉を聴いたことに関係すると思われる。やまいの語りは病気体験に留まらず生への熱い思いを内在しており、学生はやまい体験を経て強く生きる語り手への全人的な尊敬の念を強くもったと言える。一人の語りを共有することで SGD グループの凝集性が高まり各人の読んだ闘病記の特色が浮き彫りになり仲間との共感的関わりが醸成された。